

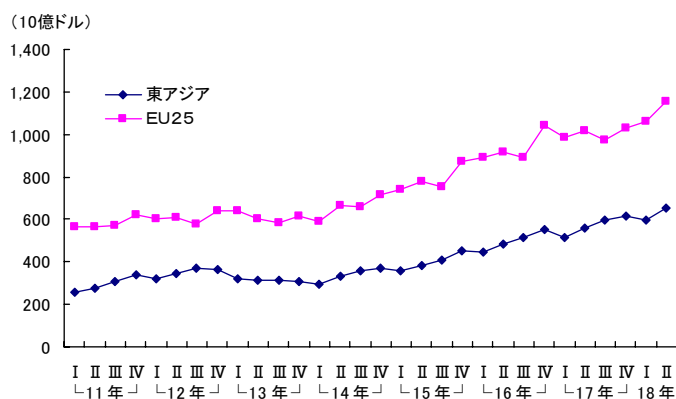
## 【東アジアの世界貿易と域内貿易の進展】

東アジアの対世界輸出入額は、急速に増加しつつある。さらに、域内貿易の輸出入比率が高いEU25では、その比率にわずかに低下傾向がみられるが、東アジアでは緩やかな上昇傾向がみられ、東アジア域内の相互依存関係は深まっている(第Ⅱ-3-8図、9図)。

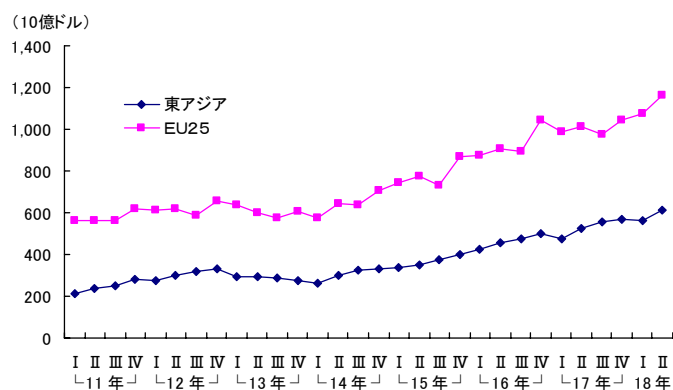
そこで本稿では、東アジアの貿易額について、貿易主体国別、品目別に増大の要因をみたらうで、主要な機械品目について完成品、部品に分け、従来から指摘されている各国における直接投資を背景にした中国を介在する三角貿易について概観する。さらに、増加しつつある東アジアの域内貿易度合いを輸出入結合度により計測することとした。

第Ⅱ-3-8図 東アジア、EU25の輸出入額の比較

### ①輸出額の比較



### ②輸入額の比較

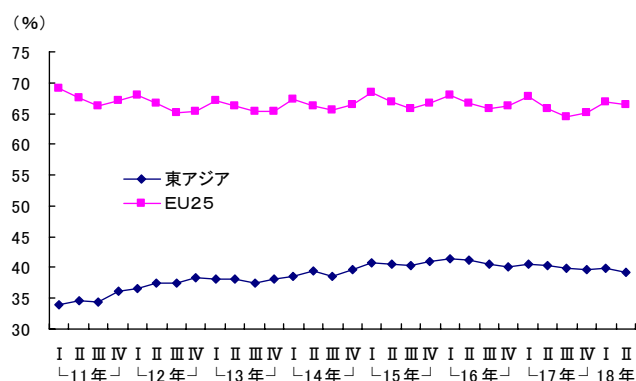


- (注) 1. 東アジアは、ASEAN+3の13ヵ国(フィリピン、シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイ、ミャンマー、ベトナム、ラオス、カンボジア、ブルネイ、韓国、中国(香港を含む)、日本)とした。ただし、World Trade Atlas の貿易主体国には限定があるため、当該資料による東アジアの貿易主体国には、ミャンマー、ベトナム、ラオス、カンボジア、ブルネイは含まれない(以下同様)。
2. EU25は、オーストリア、ベルギー、デンマーク、ドイツ、ギリシャ、フィンランド、フランス、アイルランド、イタリア、ルクセンブルク、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、オランダ、英国、キプロス、チェコ、エストニア、ハンガリー、ラトビア、リトアニア、マルタ、ポーランド、スロバキア、スロベニアとした(以下同様)。
3. 中国には香港を含め、中国と香港間の輸出入額は除外した(以下同様)。
4. 東アジア、EU25の輸出入額は、域内各国の輸出額、輸入額を合計したものである(以下同様)。

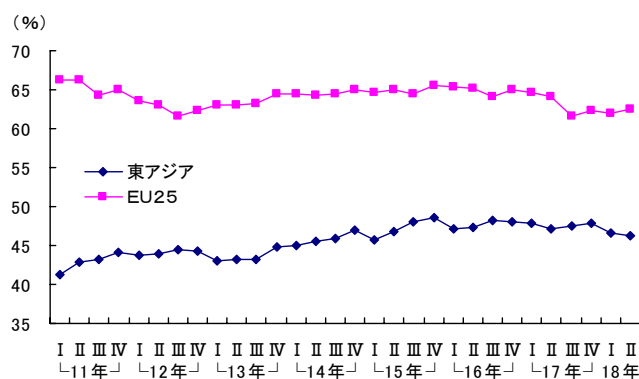
資料:World Trade Atlas

## 第Ⅱ-3-9図 東アジア、EU25の域内輸出入比率の比較

①域内輸出比率



②域内輸入比率



(注)域内輸出(輸入)比率＝域内各国の域内向け輸出(輸入)額計／域内各国の輸出(輸入)額計×100  
資料:World Trade Atlas

### (1) 東アジアの貿易額（貿易主体国別）

#### ～貿易額増大が著しい中国は、特に欧米向けの輸出額が拡大～

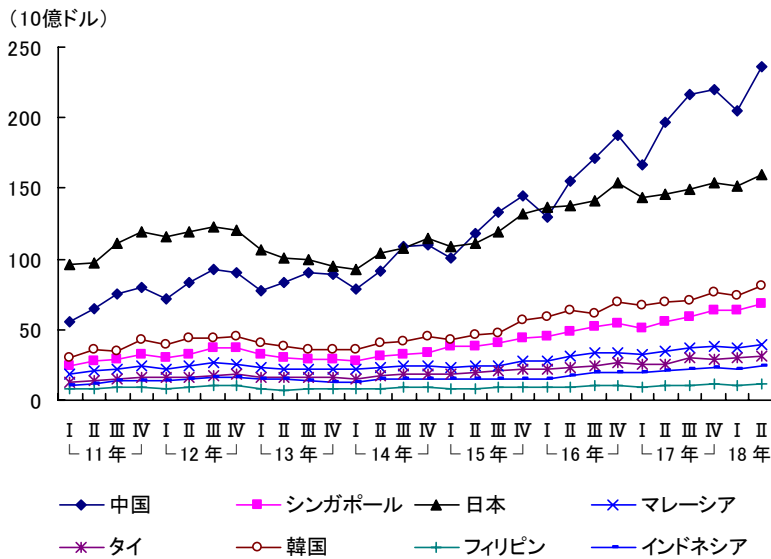
東アジア各国の輸出額の推移をみると、中国の伸張が著しく16年4～6月期には完全に日本を抜いて、現在はトップの位置を占めている。中国の17年輸出額は7,997億ドルと、11年に比べ2.9倍に拡大した。中国の輸出額の伸び(17年/11年)に対する輸出相手地域別の寄与率をみると、東アジア(26.4%)、北米(25.9%)、EU25(24.0%)向けが大きい。同様に日本の輸出額(17年は11年に比べ1.4倍)の寄与率をみると、東アジア向け(66.8%)が大半を占める(第Ⅱ-3-10図)。

また輸入額の推移をみると、中国は14年1～3月期まで日本とほぼ並行して推移していたが、14年4～6月期以降、日本を大きく引き離しトップの位置を占めている。中国の17年輸入額は8,161億ドルと、11年に比べ3.1倍の大きさに拡大した。中国の輸入額の伸び(17年/11年)に対する輸入相手地域別の寄与率をみると、東アジア(49.9%)が5割を占め、次いで他のアジア(14.6%)、EU25(9.7%)、北米(6.4%)の順となっている。同様に日本の輸入額(17年は11年に比べ1.6倍)の寄与率をみると、東アジア(49.1%)、次いで中近東(28.0%)となっている(第Ⅱ-3-10図)。

このように東アジア各国における対世界輸出入額は、特に中国の増大が著しく、中でも中国からEU25、北米向けの輸出額増大が顕著となっている。また、これまで日本を先頭に得意な産業分野に特化し、近隣諸国もこれに追随するという雁(がん)行型の発展を遂げてきたともいえる東アジア各国の経済活動は、国際競争力を高めつつ発展する中国の大きな変化が特筆される。

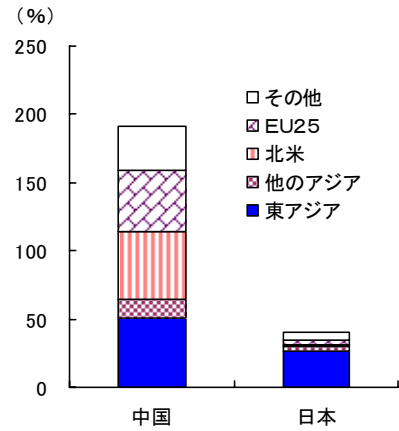
## 第Ⅱ-3-10図 東アジア各国の対世界貿易額の推移

### ①輸出額

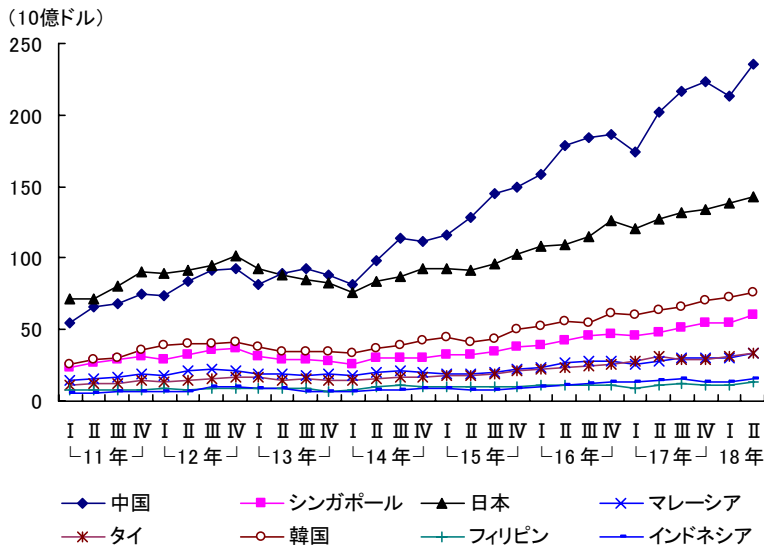


### ②中国、日本の対世界輸出額

伸び率寄与度(17年/11年)

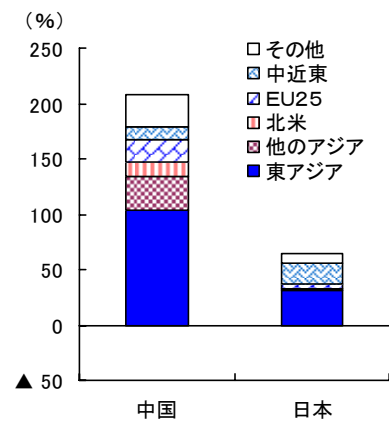


### ③輸入額



### ④中国、日本の対世界輸入額

伸び率寄与度(17年/11年)



資料:World Trade Atlas

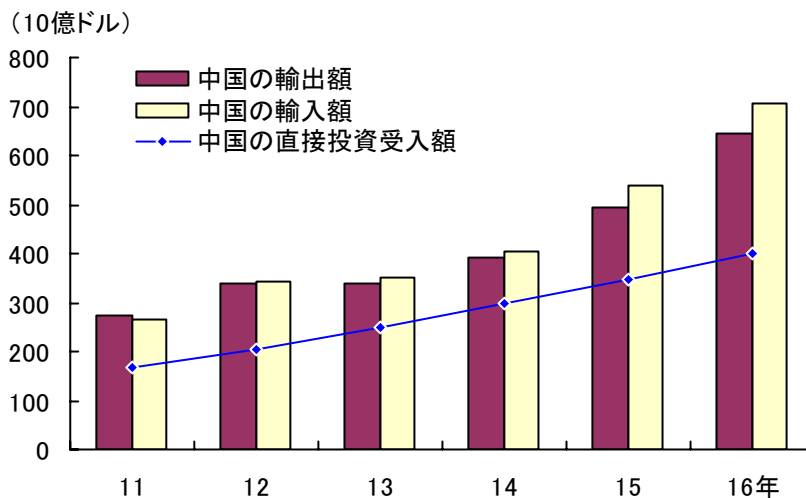
## (2) 中国向け直接投資額と貿易特化係数

～増大する中国向け直接投資額と中国の輸出入額～

対世界貿易額の伸張が著しい中国の輸出入額と、世界の中国向け直接投資額の推移を比べると、互いにほぼ連動した形で推移している。これにより、各国の製造業企業等が中国へ生産・加工拠点を積極的に展開したことが、中国の輸出入額増大に繋がったと推察される(第Ⅱ-3-11図)。

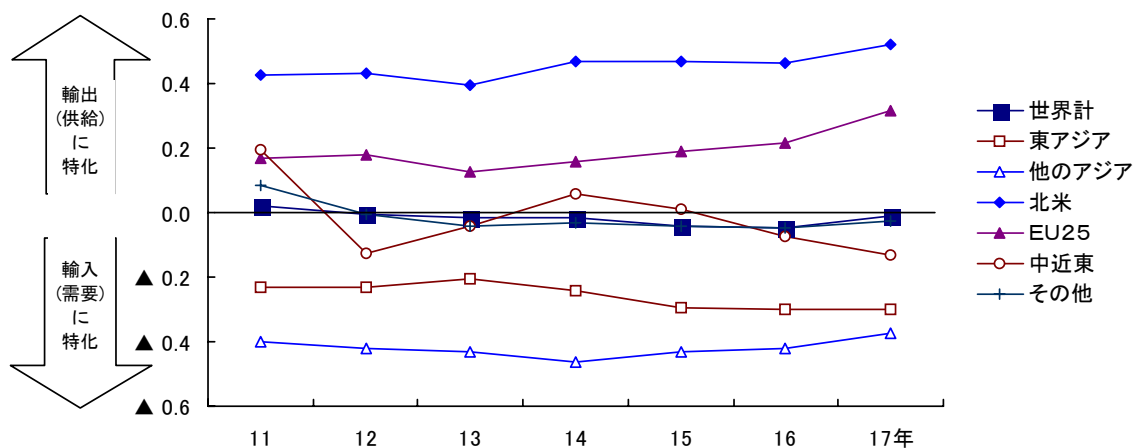
次に、中国の貿易特化係数をみると、中国は北米、EU25に対しては供給者としての役割が大きく、アジアに対しては需要者の役割が大きい。中国は12年以降、輸入超過となっているが、これは主に東アジアからの輸入比率が上昇傾向で推移しているためである。東アジアからの輸入については、中国を介在する三角貿易（(4)で後述する）の影響が考えられ、欧米向けの完成品輸出のため東アジア域内からの部品供給が増加しているものと推測され、これによって北米、EU25向けの輸出比率は上昇傾向となっている（第Ⅱ-3-12図）。

第Ⅱ-3-11図 中国の直接投資受入額と輸出入額の推移



(注) 直接投資受入額は、8年以降の累積値である。  
資料: World Trade Atlas、ジェトロ海外情報ファイル

第Ⅱ-3-12図 中国の貿易特化係数の推移



(注) 貿易特化係数は、対象品目の輸出額から輸入額を引いた純輸出額を、輸出額と輸入額を合算した総貿易額で割った数値であり、1とマイナス1の間に収まる。貿易特化係数が1に近づくにつれて対象品目の貿易構造が輸出に偏り、マイナス1に近づけば輸入に偏ることになる。ゼロならば輸出入が均衡している。

資料: World Trade Atlas

### (3) 東アジア貿易額の貿易品目別の変化

～世界の生産拠点としての東アジアの輸出入額における部品割合が上昇～

#### ① 伸び率寄与度

次に、東アジアの対世界貿易額を品目別にみても。17年貿易額をHS品目の2桁別に11年と比較した伸び率寄与度は、輸出額では電気機械(85類)、一般機械(84類)、鉄道以外の輸送機械(87類)等の増加が著しい。輸入額では、一般機械(84類)、鉱物性燃料(27類)、卑金属製品(83類)等の増加が著しい。東アジア全体としては、製品の加工・生産に必要な原燃料(鉱物性燃料、卑金属製品等)の多くを輸入し、欧米をはじめ多くの国に機械加工品(電気、一般機械、鉄道以外の輸送機械等)を供給している姿がみてとれる。これは、東アジアが米国、EU25等にとって、品目によっては生産拠点としての役割を果たしていることをうかがわせている(第Ⅱ-3-5表)。

第Ⅱ-3-5表 東アジアのHS品目(2桁)別輸出入額の比較

東アジア・輸出額 増加・減少各10品目	17年対11年		
	対11年比93.0% に対する内訳寄与 度:%ポイント	伸び率 (対11年比:%)	平均伸び率 (年率:%)
総計	93.02	93.0	11.6
第85類 電気機器及びその部分品並びに録音機、音声再生機並びにテレビジョンの映像及び音声の記録用又は再生用の機器並びにこれらの部分品及び附属品	22.52	89.7	11.3
第84類 原子炉、ボイラー及び機械類並びにこれらの部分品	16.69	94.2	11.7
第87類 鉄道用及び軌道用以外の車両並びにその部分品及び附属品	7.45	83.6	10.7
第27類 鉱物性燃料及び鉱物油並びにこれらの蒸留物、歴青物質並びに鉱物性ろう	6.43	209.7	20.7
第39類 プラスチック及びその製品	3.20	125.2	14.5
第90類 光学機器、写真用機器、映画用機器、測定機器、検査機器、精密機器及び医療用機器並びにこれらの部分品及び附属品	3.18	84.1	10.7
第72類 鉄鋼	3.04	177.0	18.5
第29類 有機化学品	2.92	142.1	15.9
第73類 鉄鋼製品	2.00	157.2	17.1
第61類 衣類及び衣類附属品(メリヤス編み又はクロセ編みのものに限る。)	1.87	86.9	11.0
第14類 植物性の組物材料及び他の類に該当しない植物性生産品	▲0.00	▲0.6	▲0.1
第1類 動物(生きていないものに限る。)	▲0.00	▲8.3	▲1.4
第91類 時計及びその部分品	▲0.02	▲2.1	▲0.3
第2類 肉及び食用のくず肉	▲0.06	▲53.1	▲11.8

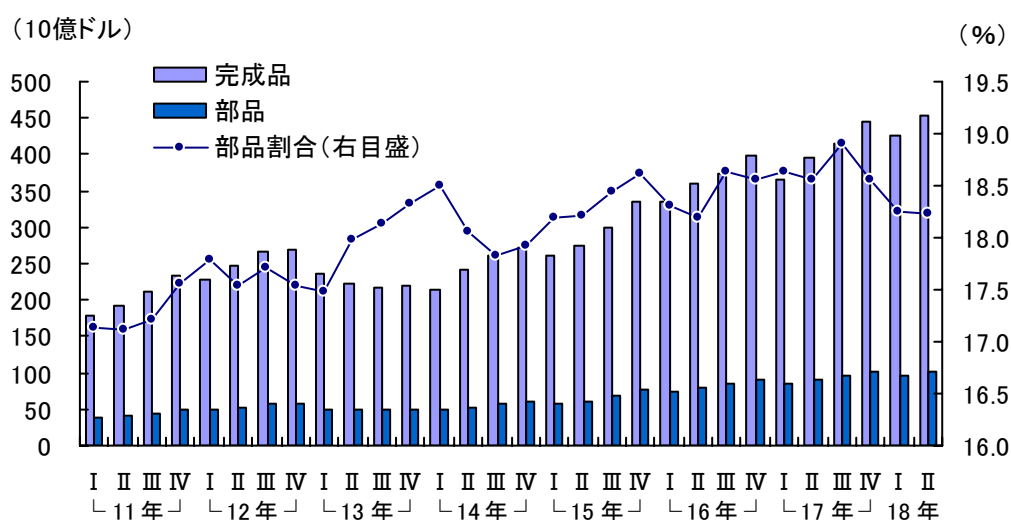
東アジア・輸入額 増加・減少各10品目	17年対11年		
	対11年比116.7% に対する内訳寄与 度:%ポイント	伸び率 (対11年比:%)	平均伸び率 (年率:%)
総額	116.73	116.7	13.8
第84類 原子炉、ボイラー及び機械類並びにこれらの部分品	28.35	127.6	14.7
第27類 鉱物性燃料及び鉱物油並びにこれらの蒸留物、歴青物質並びに鉱物性ろう	25.60	231.2	22.1
第83類 各種の卑金属製品	15.05	107.2	12.9
第89類 船舶及び浮き構造物	6.99	215.1	21.1
第72類 鉄鋼	4.80	194.1	19.7
第39類 プラスチック及びその製品	3.92	120.2	14.1
第29類 有機化学品	3.91	154.0	16.8
第26類 鉱石、スラグ及び灰	3.63	317.4	26.9
第86類 鉄道用又は軌道用の機関車及び車両並びにこれらの部分品、鉄道又は軌道の線路用装備品及びその部分品並びに機械式交通信号用機器(電気機械式のものを含む。)	2.81	133.8	15.2
第71類 天然又は養殖の真珠、貴石、半貴石、貴金属及び貴金属を張つた金属並びにこれらの製品、身辺用模造細貨類並びに貨幣	1.52	72.5	9.5
第66類 傘、つえ、シートステッキ及びむち並びにこれらの部分品	▲0.00	▲0.1	▲0.0
第92類 楽器並びにその部分品及び附属品	▲0.01	▲14.6	▲2.6

資料:World Trade Atlas

## ② 完成品、部品別総貿易額

さらに東アジアの主要機械品目（輸出額増加寄与の上位3品目＝84類：一般機械、85類：電機機械、87類：鉄道以外の輸送機械）について、東アジアの総貿易額を完成品、部品別に分けてみた。結果、完成品、部品ともに総貿易額が増加傾向で推移しており、特に輸出入額に占める部品割合には増加する傾向がみられる。これは、東アジアにおいて国境を越えた部品調達が行われる等、高度な分業体制が構築されていることを意味するものと考えられる（第Ⅱ－3－13図）。

第Ⅱ－3－13図 東アジアの総貿易額の推移（84類、85類、87類）



- (注) 1. 総貿易額は、東アジア各国の対世界貿易額の合計である。総貿易額＝輸出額＋輸入額  
 2. 部品割合＝部品／(完成品＋部品)×100  
 3. 完成品は、HS品目84、85、87から以下の部品を除外したものとした。部品は、HS品目8409、8431、8448、8466、8473、8485、8503、8522、8529、8538、8548、8708、8714を使用した(以下同様)。  
 資料:World Trade Atlas

## (4) 東アジアの中国を介在する欧米との三角貿易について

～「部品供給国」としての日本、韓国、シンガポール、「最終組立国」としての中国～

前述のように、東アジアにおいては国境を越えた部品調達が行われていることが推測され、その一方で、中国が東アジアからの輸入額及び欧米向けの輸出額を拡大させている。この点については従来からいわれているように、日本や米国等から東アジアへの直接投資の増大による現地生産拠点の生産能力の向上を背景とした、中国を介在する三角貿易（日本等から中国へ部品を供給し、現地で組立を行い、中国から欧米へ完成品を輸出すること）の進展を推測させる。そこで、ここでは既出の主要機械品目（84類：一般機械、85類：電機機械、87類：鉄道以外の輸送機械）について、東アジアの輸出

額を完成品と部品に分けその実態を概観してみる(第Ⅱ-3-14図)。

まず、部品の17年輸出額が、11年に比べ大きく増加した日本、中国、韓国、シンガポールについて、輸出額の伸び(17年/11年)に対する輸出相手地域別の寄与率をみると、いずれも東アジア向けの寄与率が最も高く(東アジア向けが日本では50.4%、中国では35.5%、韓国では57.4%、シンガポールでは75.4%)、この4カ国は東アジア向けによって部品輸出が増加している。

そこで、東アジア向けの部品輸出額について、各国の輸出額の伸び(17年/11年)に対する輸出相手国別の寄与率をみると、日本、韓国、シンガポールで中国向けの寄与率が最も高い(中国向けが日本では69.1%、韓国では88.0%、シンガポールでは41.8%)。なお、中国では日本向けが29.7%、韓国向けが24.2%となっている。東アジア向けに着目すると、部品は日本及び韓国、シンガポールから中国向けの輸出が急増していることがわかる。

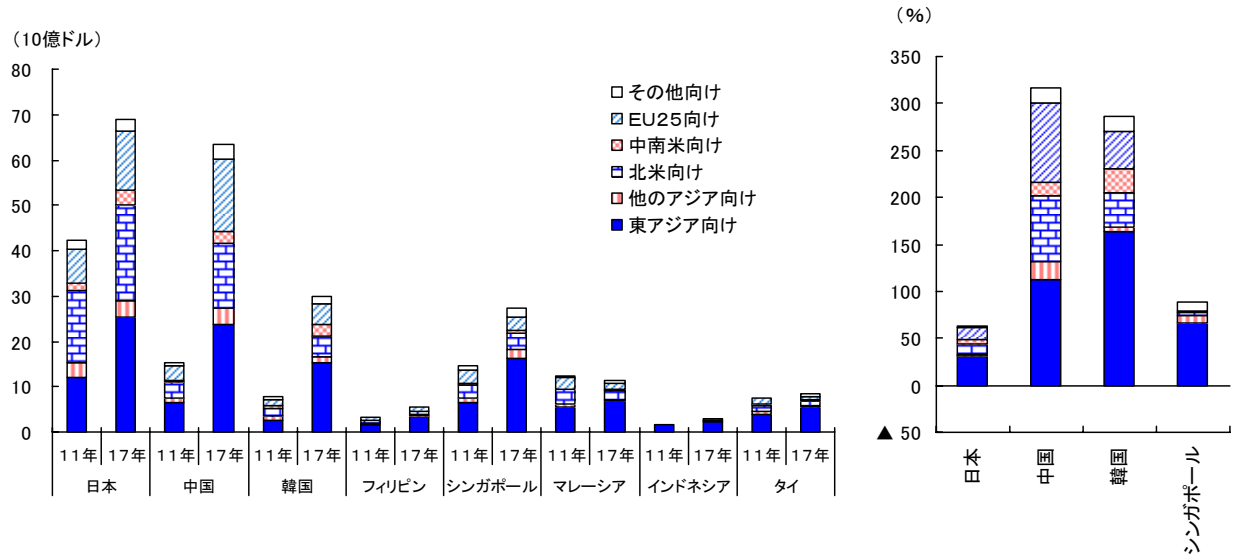
次に完成品の17年輸出額をみると、11年に比べ部品と同様に大きく増加した日本、中国、韓国、シンガポールについて、輸出額の伸び(17年/11年)に対する輸出相手地域別の寄与率をみると、中国は北米向け(29.5%)、EU25向け(27.7%)が高い。日本では東アジア向け(59.2%)が最も高く、その一方、北米向け(2.2%)、EU25向け(4.3%)の増加寄与は小さい。韓国及びシンガポールは東アジア向けが最も高い(韓国は41.1%、シンガポールは82.2%)。

このように東アジアの完成品輸出額の増加は、中国から北米、EU25向けが寄与しており、それとは対照的に日本から北米、EU25向けの寄与が小さくなっている。

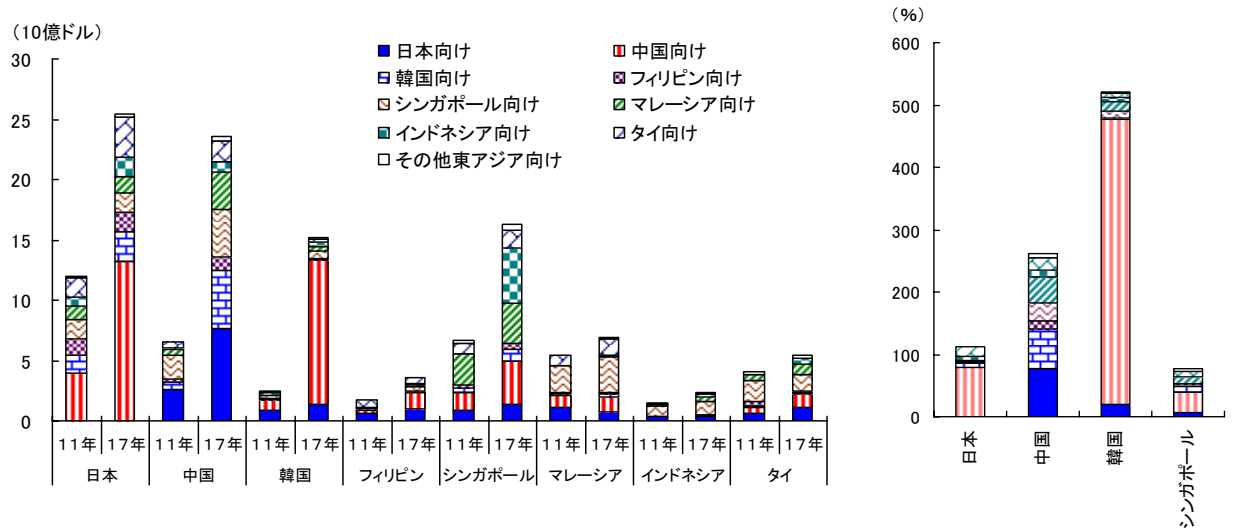
これらのことから主要機械品目でみた場合、東アジア域内では日本、韓国及びシンガポールは完成品の輸出額も多いものの、中国などに部品を輸出する「部品供給国」としての役割があり、中国が製品の加工組立を行う「最終組立国」の役割を担うといった分業形態が形成されていること、さらに、日本から欧米への直接的な輸出以外にも、中国で加工組立を経て、最終的に欧米に輸出されるという貿易経路が存在することが示唆されている。つまり東アジア域内においては、部品を中心とした工程間分業ネットワークが形成されていることが推測され、このことが結果として日本の欧米向け輸出額の伸びを抑制しているものと考えられる。

第Ⅱ-3-14図 東アジアからの部品及び完成品輸出額の比較(84類、85類、87類)

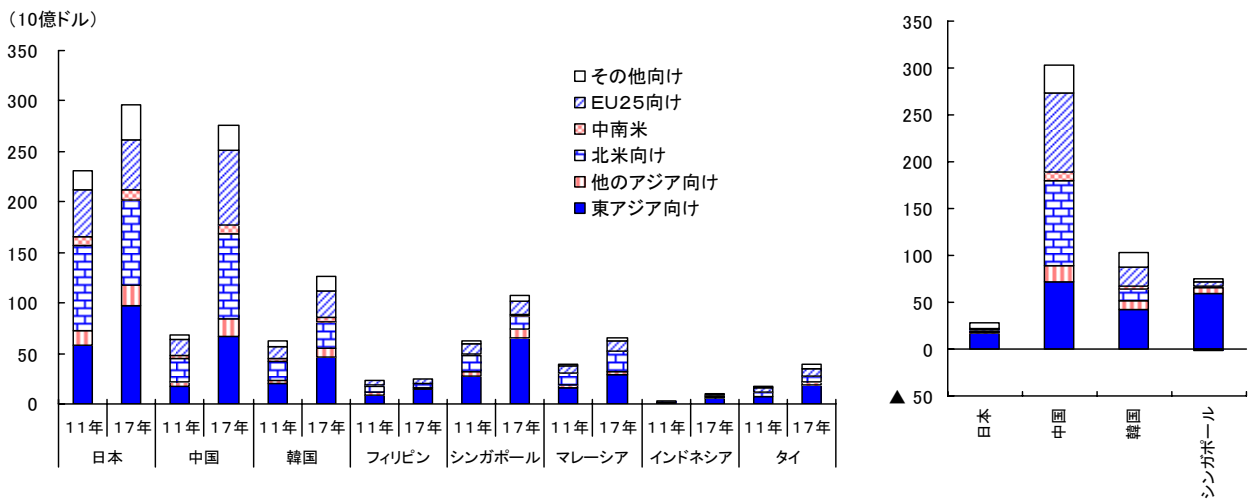
①部品輸出額(右側は同主要国の伸び率寄与度(17年/11年))



②東アジア向けの部品輸出額(右側は同主要国の伸び率寄与度(17年/11年))



③完成品輸出額(右側は同主要国の伸び率寄与度(17年/11年))



(注)②のシンガポールからインドネシア向けの部品輸出額は11年データが把握できないため、これについては伸び率寄与度から除外した。

資料:World Trade Atlas



## (5) 東アジア貿易額の貿易相手地域別変化（域内貿易比率）

### ～東アジアは、工程間分業によって域内輸出入額が急増～

東アジアの貿易額は中国の影響で大きく増加している。中国の貿易額増加の主要因は前述のように、日本を含む海外資本による技術移転の進行を背景とした現地企業の生産基盤の強化と、これを背景とした中国を介在した三角貿易の進展によるものと考えられる。そこでここでは東アジアの輸出入額を域内外別に概観してみる（第Ⅱ－3－15図）。

東アジアの輸出額を域内外別にみると、17年の域内向け輸出額は、11年に比べ大きく伸張しており（2.2倍）、域外向けの伸び（1.8倍）を上回っている。その結果、域内輸出比率は上昇傾向がみられる（11年：34.8%→17年：40.0%）。

さらに、域内輸出比率を貿易主体国別にみると、17年はシンガポール、インドネシア等が高い。このうちシンガポールは中国向け輸出比率が年々高まっている。11年と比べるとフィリピンの上昇が目立っており、これは中国向け輸出比率の急上昇によるものである。

一方、東アジアの輸入額を域内外別にみると、域内輸入額の伸びが大きく（17年は11年に比べ域内は2.4倍、域外は2.0倍）、その結果、域内輸入比率は高まっている（11年：43.0%→17年：47.5%）。

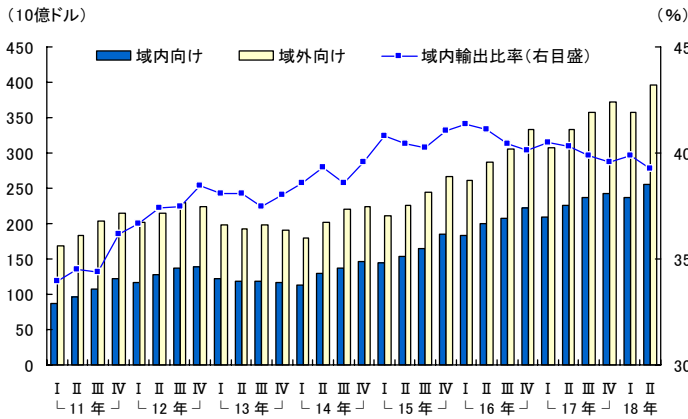
さらに、域内輸入比率を貿易主体国別にみると、17年はマレーシア、インドネシア等が高い。このうち、マレーシアは中国からの輸入比率が急上昇している。11年と比べるとインドネシアの上昇が目立っており、これは、シンガポール及び中国からの輸入比率の急上昇によるものである。

ちなみに、東アジアの主な域外貿易先をみると、輸出額では、北米、EU25が大きく、輸入額では、北米、EU25、中近東が大きい（第Ⅱ－3－16図）。

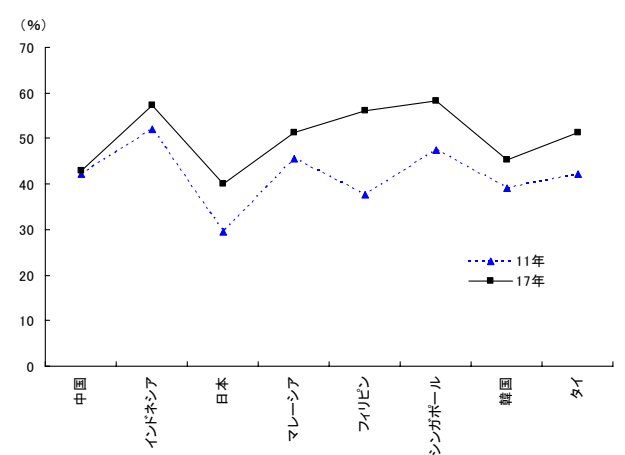
以上のように、東アジアにおいては、欧米などとの域外貿易額が増加する一方で、域内の輸出入額が急増しており、これは、中国を中心とした東アジアの工程間分業によって部品等の域内取引が急速に活発化したことによるものと考えられる。

## 第Ⅱ-3-15図 東アジアの域内外向け輸出入額と域内輸出入比率

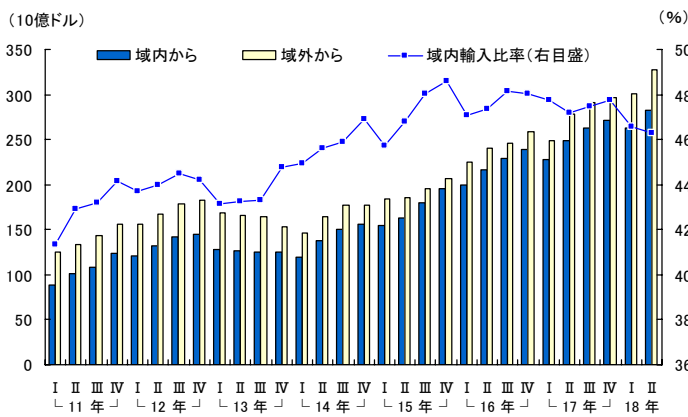
### ①域内輸出比率の推移



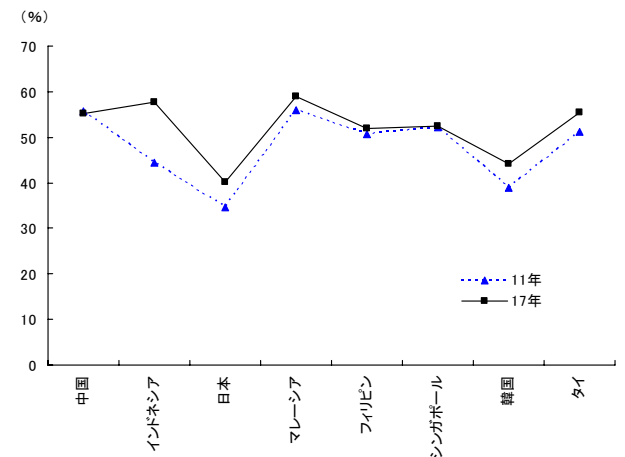
### ②各国の域内輸出比率の比較



### ③域内輸入比率の推移



### ④各国の域内輸入比率の比較

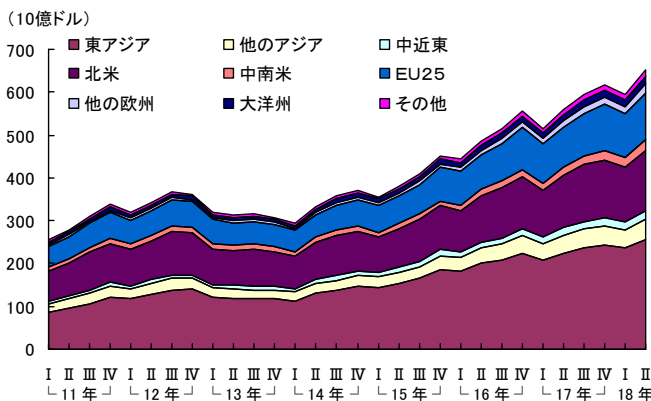


(注) 域内輸出(輸入)比率 = 域内各国の域内向け輸出(輸入)額計 / 域内各国の輸出(輸入)額計 × 100 (以下同様)

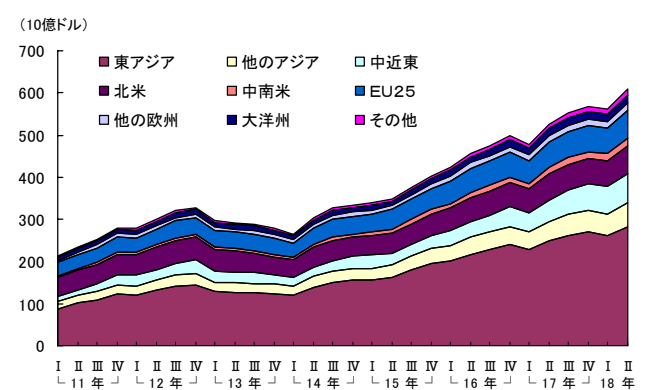
資料: World Trade Atlas

## 第Ⅱ-3-16図 東アジア各国の対世界貿易額の推移

### ①輸出額



### ②輸入額



資料: World Trade Atlas

## (6) 東アジア各国の貿易結合度

### ～域内貿易の拡大を背景に、東アジア各国間の貿易結合度は上昇～

以上のように東アジアでは、域内貿易が急拡大していることから相互依存関係の高まりは明らかである。そこで、ここでは東アジア各国同士の輸出入結合関係を貿易結合度により計測してみる。併せて、東アジアの主要な輸出先である米国、EU25において最大の貿易国であるドイツについても同様にみることにする。貿易結合度とは、世界全体の貿易量のうち、当該二国間の貿易関係がどの程度の関係度合いであるかを示すもので、結合度が1.0を下回る場合は相対的に弱い関係を、1.0を上回る場合は相対的に強い関係を、そして1.0の場合は、一国に特化することのない状態を示している(第Ⅱ-3-17図)。

- ① 日本からみた貿易結合度は、輸出はフィリピン、インドネシア、タイの順に結び付きが強いが係数の差は小さい(特に断りのない限り15年値、以下同様)。輸入はインドネシア、タイ、中国の順となっている。日本は、インドネシアやタイと相互依存関係が強い。特徴としては、フィリピンとの輸出結合度が低下し、輸入結合度が上昇したことと、インドネシアとの関係では輸出入とも結合度が上昇したことが挙げられよう。

なお日本の米国、ドイツとの結び付きでは、輸出では東アジア各国を下回っており、輸入では東アジアで最も低いシンガポールを米国が超えているが、ドイツは下回っている。総じて日本は、米国、ドイツよりも東アジア各国との結び付きが強いことがわかる。

- ② 中国からみた貿易結合度は、輸出は日本、インドネシア、韓国の順に結び付きが強い。輸入は、もともと韓国との結び付きが最も強いが、近年、急速にフィリピンとの結合が韓国並の大きさにまで深まっているのが目立つ。
- ③ 韓国からみた貿易結合度は、輸出はインドネシア、中国、そして近年結びつきを急速に弱めているフィリピンの順となっている。輸入はインドネシア、日本、フィリピンの順となっている。
- ④ フィリピンからみた貿易結合度は、輸出は近年、マレーシアとの結び付きを急速に強めており、次いで、シンガポール、タイの順となっている。輸入は、結び付きを強めたタイが最も高く、次いで、シンガポール、日本の順となったものの係数の差は小さい。
- ⑤ シンガポールからみた貿易結合度は、輸出入とも一貫してマレーシアとの結び付きが群を抜いて強く、これはシンガポールがマレーシアの貿易中継港としても機能しているためと考えられる。
- ⑥ マレーシアからみた貿易結合度は、輸出入とも一貫してシンガポールとの結び付きが群を抜いて強いが輸入結合度は急速に低下しており、その一方、輸入はフィリピンとの

関係が急速に強まり15年はシンガポールを上回っている。

- ⑦ インドネシアからみた貿易結合度は、輸出はシンガポール、日本、近年結び付きを強めているマレーシアの順となった。輸入はシンガポール、結び付きを急速に強めたタイ、そしてマレーシアの順である。インドネシアはシンガポール、マレーシアとの相互依存関係が強い。
- ⑧ タイからみた貿易結合度は、輸出は急速に結び付きを深めているインドネシアが最も強く、次いで、マレーシア、シンガポールの順となっている。輸入は、マレーシア、日本、フィリピンの順となっているが、フィリピン、マレーシアとの結合度が上昇し、シンガポールとの結合度が急速に低下している。タイはマレーシアとの相互依存関係が強い。
- ⑨ また、米国からみた貿易結合度は、輸出はフィリピンとの結び付きが最も強い。輸入は、フィリピン及び日本との関係が弱まったが、中国との結びつきが近年緊密さを増している。このように、米国の輸入において中国との関係が緊密さを増し、日本との関係が相対的に弱まっていることについては、前述のように中国を介在する三角貿易の増加が影響しているものと考えられる。
- ⑩ ドイツからみた貿易結合度は、輸出は米国、中国、インドネシアの順に強い。輸入は近年、急速に緊密さを増しているフィリピンとの結び付きが最も強く、次いで、中国、米国の順となったが、日本との関係は急速に弱まっている。ドイツの中国からの輸入額は11年から15年にかけて 1.8 倍に拡大しているものの、ドイツはEU25域内貿易の拠点であることから、東アジア各国及び米国との係数は 1.0 を下回り、ドイツからみた関係性は非常に弱いものとなっている。

なお、貿易結合度の各国の15年単純平均値をみると、東アジア該当国間の貿易では、輸出入ともに11年と比べ0.2の上昇(輸出:2.7→2.9、輸入:2.5→2.7)、それ以外は輸出入ともに同▲0.1の低下(輸出:0.7→0.6、輸入:0.8→0.7)となり、東アジアでは域内貿易の拡大を背景に貿易面での関係が緊密化していることがわかる。

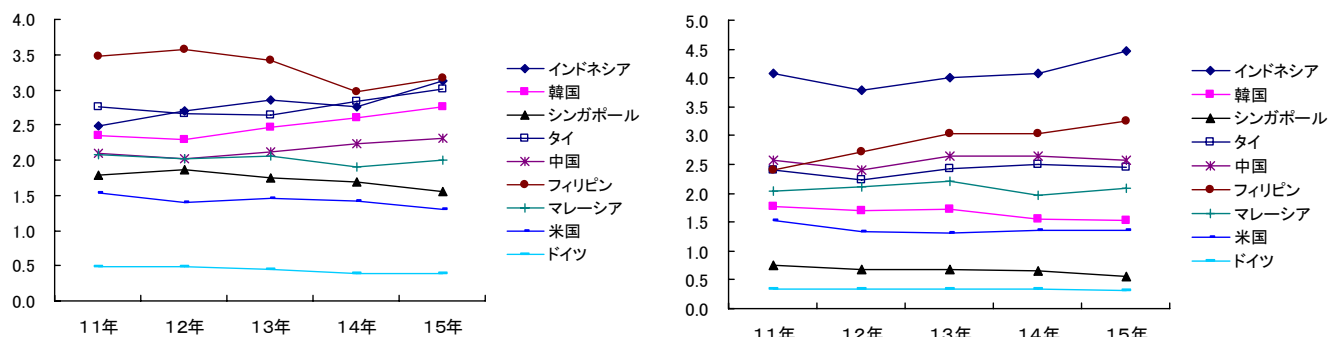
また、中国向け輸出の15年結合度については、日本からの輸出(2.3)、韓国からの輸出(3.3)、シンガポールからの輸出(2.0)がいずれも2.0以上と高く、これらは東アジアの中でも中国との結び付きが特に強い部類に入る。また、中国からの輸出は、米国向け(1.4)が平均の1.0を超えており、中国を介在する三角貿易の実態がここにも表れている。

さらに、貿易結合度において2国間の緊密度が大きく変化している経路について、その貿易額の伸び(15年/11年)に対する寄与度が大きい貿易品目をみると、全般

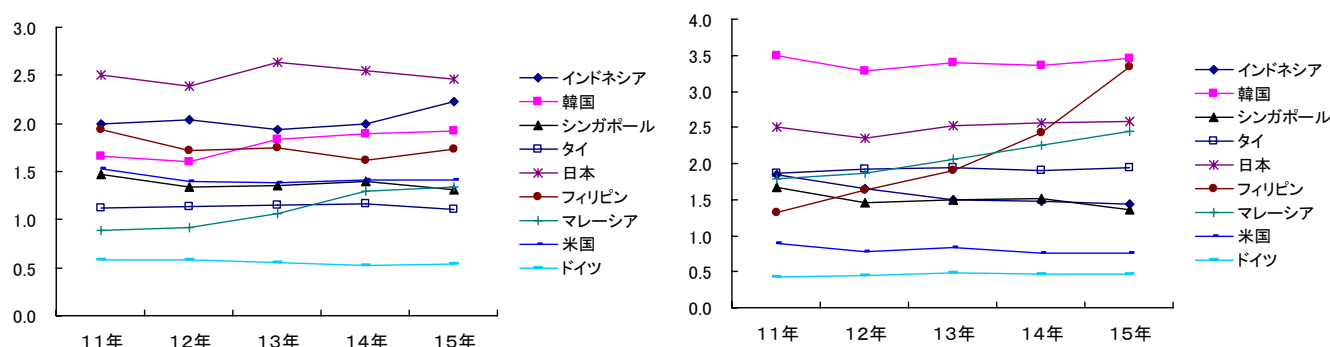
的に、一般機械(84類)、電気機械(85類)、鉄道以外の輸送機械(87類)の影響が大きいことが特徴的である。これらの品目のうち部品供給ルートの比重が高まったものとしては、既出の日本、韓国及びシンガポールから中国向け供給ルートの他に、タイからインドネシア向け(87類)、マレーシアからタイ向け(84類)、フィリピンから中国向け(84類)、フィリピンからタイ及びインドネシア向け(87類)が挙げられる。このうち、タイは自動車産業の集積を備えていることから、市場潜在力の大きいインドネシアへの自動車部品等の供給拠点となっているものと考えられる。マレーシアは、電子・電気機械を始めとする機械製造業等が経済発展の中心となっていること、また、フィリピンは政府が近年IT分野に重点を置いていることから、これらの国々からタイの自動車産業向け等に部品供給が行われているものと推測される。なお、中国をはじめ各国とも総じてフィリピンからの輸入の係数が高い傾向があり、国内市場の小さいフィリピンが部品等の輸出国として成長していることが推測できる(第Ⅱ-3-6表)。

第Ⅱ-3-17図 東アジア主要国等における貿易結合度の推移

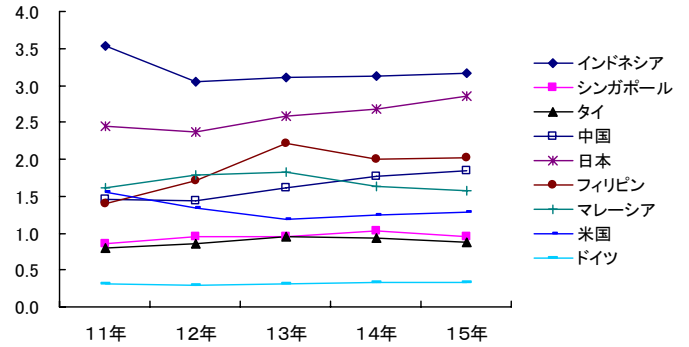
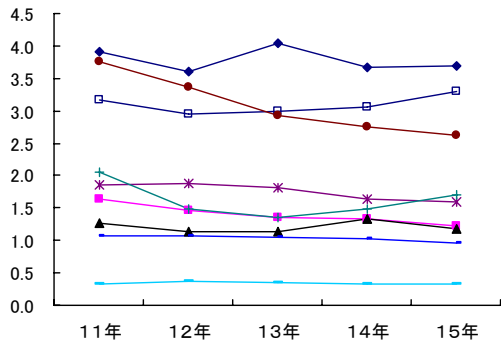
①日本からみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



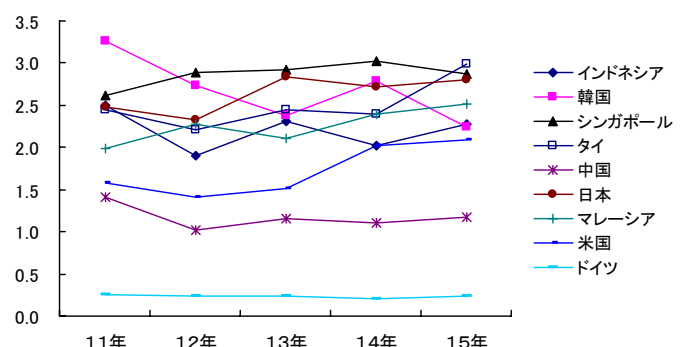
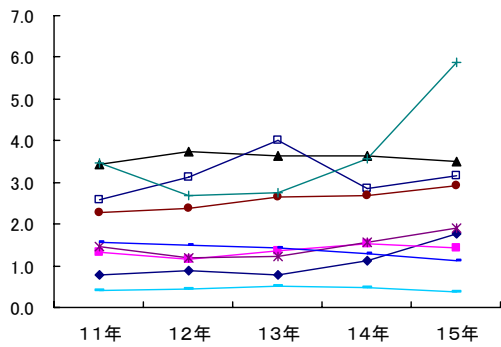
②中国からみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



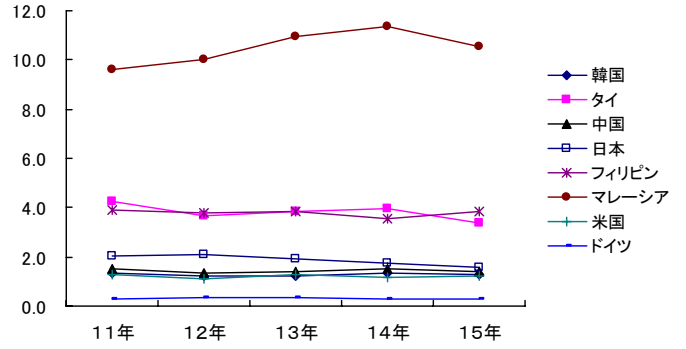
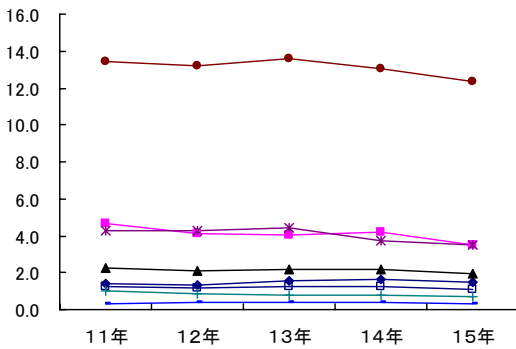
③韓国からみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



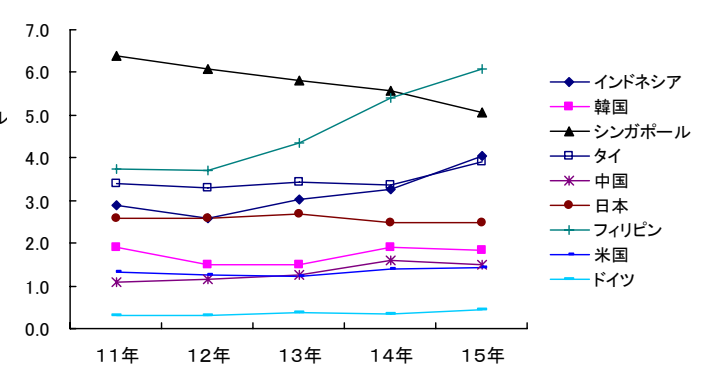
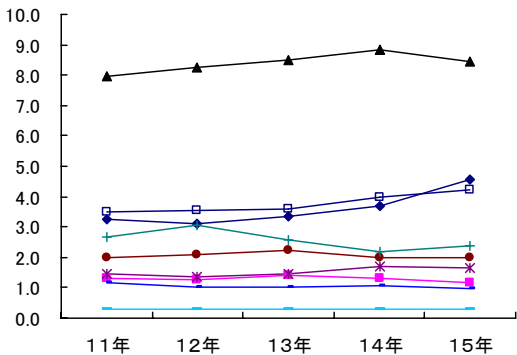
④フィリピンからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



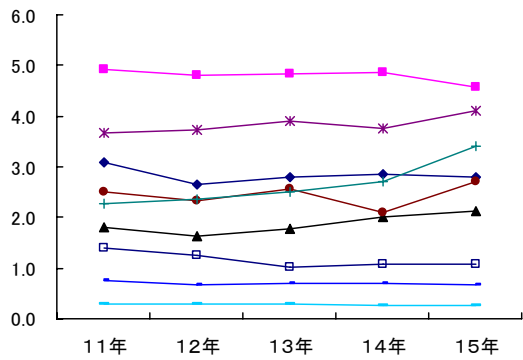
⑤シンガポールからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



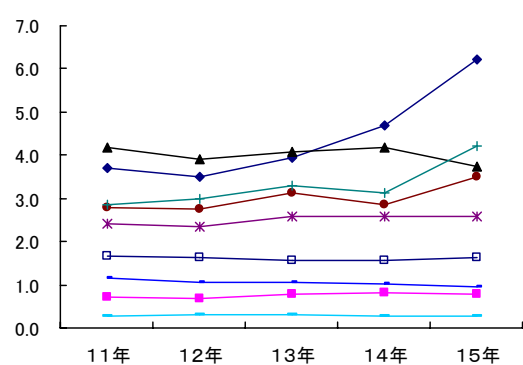
⑥マレーシアからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



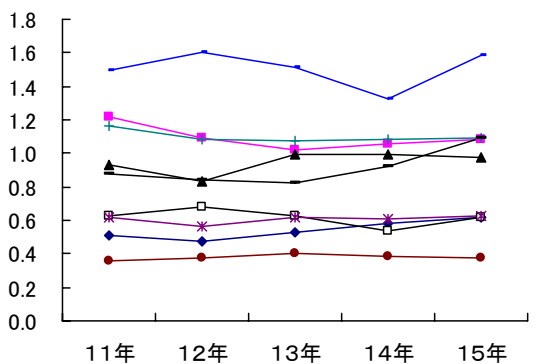
⑦インドネシアからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



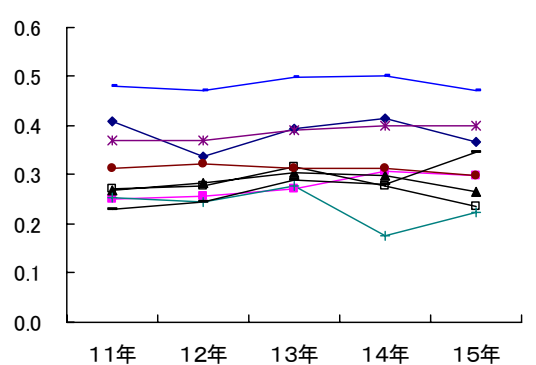
⑧タイからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



⑨米国からみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



⑩ドイツからみた貿易結合度(左側:輸出、右側:輸入)



(注) 1. 貿易結合度は、i国の輸出結合度の場合、j国の世界に占める輸入シェアを、i国の総輸出に占めるj国への輸出シェアと比較して、後者が前者を上回る場合、i国からj国への輸出シェアはj国の世界平均輸入シェアを上回り、i国のj国との貿易関係は緊密度が高いと考える。この値が1.0以下の場合には相対的に弱い関係を、1.0以上の場合には強い関係を、そして1.0の場合には一国に特化することのない状態を示す(以下同様)。

2. i国からみたj国との輸出結合度 = (i国からj国への輸出額 / i国の対世界輸出額) / (j国の対世界輸入額 / (世界全体の輸入額 - i国の対世界輸入額)) (以下同様)

3. i国からみたj国との輸入結合度 = (i国のj国からの輸入額 / i国の対世界輸入額) / (j国の対世界輸出額 / (世界全体の輸出額 - i国の対世界輸出額)) (以下同様)

資料: World Trade Atlas、「貿易統計年鑑」(国際連合統計局)

第Ⅱ-3-6表 貿易結合度に大きな変化がみられる経路の  
主要貿易品目と伸び率寄与度

NO.	区分	貿易 主体国	貿易 相手国	主要貿易品目	当該品目の 貿易額 (100万ドル)		2国間輸出額or 輸入額の伸び (15年/11年)に 対する当該品目 の伸び率寄与度 (%)	うち部品の伸 び率寄与度 (%)	
					11年	15年			
1	輸出	日本	→	フィリピン	85 電気機械	3,744	3,437	▲ 3.45	1.58
					84 一般機械	2,012	1,814	▲ 2.23	0.14
	輸出	日本	→	インドネシア	87 鉄道以外の輸送機械	269	1,123	17.22	9.03
					84 一般機械	1,146	1,968	16.58	4.32
					85 電気機械	1,574	2,828	23.27	2.21
輸入	日本	←	フィリピン	85 電気機械	1,574	2,828	23.27	2.21	
輸入	日本	←	インドネシア	27 鉱物製燃料	5,805	8,193	18.70	-	
2	輸入	中国	←	フィリピン	85 電気機械	1,107	6,287	213.05	6.52
					84 一般機械	603	2,714	86.83	52.09
3	輸出	韓国	→	フィリピン	85 電気機械	1,840	1,440	▲ 12.80	1.37
4	輸出	フィリピン	→	マレーシア	85 電気機械	1,244	1,822	39.15	▲ 0.18
					87 鉄道以外の輸送機械	12	57	36.34	17.68
5	輸出	シンガポール	→	タイ	27 鉱物製燃料	254	161	▲ 1.84	-
					85 電気機械	8,651	11,470	16.31	▲ 0.89
6	輸出	マレーシア	→	インドネシア	29 有機化学品	61	201	11.42	-
					27 鉱物製燃料	252	386	10.95	-
					85 電気機械	4,580	3,694	▲ 9.67	▲ 1.76
7	輸出	インドネシア	→	マレーシア	85 電気機械	56	262	15.41	3.03
					18 ココア及びその調整品	28	210	13.68	-
8	輸出	タイ	→	マレーシア	40 ゴム及びその製品	25	467	21.96	-
					85 電気機械	706	1,016	15.42	▲ 0.66
	輸出	タイ	→	インドネシア	87 鉄道以外の輸送機械	5	367	37.63	12.83
					84 一般機械	42	233	19.83	5.25
					85 電気機械	261	554	36.05	2.22
	輸入	タイ	←	フィリピン	87 鉄道以外の輸送機械	57	361	37.40	17.83
					84 一般機械	195	1,129	37.24	27.40
輸入	タイ	←	マレーシア	85 電気機械	773	1,485	28.38	6.15	
				85 電気機械	26,374	19,316	▲ 5.37	▲ 0.05	
9	輸入	米国	←	日本	84 一般機械	31,772	25,144	▲ 5.04	0.13
					84 一般機械	10,497	30,363	21.52	3.77
	輸入	米国	←	中国	85 電気機械	17,077	30,077	14.08	0.44
					85 電気機械	5,651	4,130	▲ 12.28	0.11
					84 一般機械	2,530	1,914	▲ 4.97	▲ 6.52
10	輸入	ドイツ	←	日本	87 鉄道以外の輸送機械	4,399	1,473	▲ 14.56	0.30
					85 電気機械	398	803	30.00	▲ 0.32
					84 一般機械	467	821	26.24	▲ 3.34

(注) 部品の伸び率寄与度が10%以上の値について網掛けを行った。

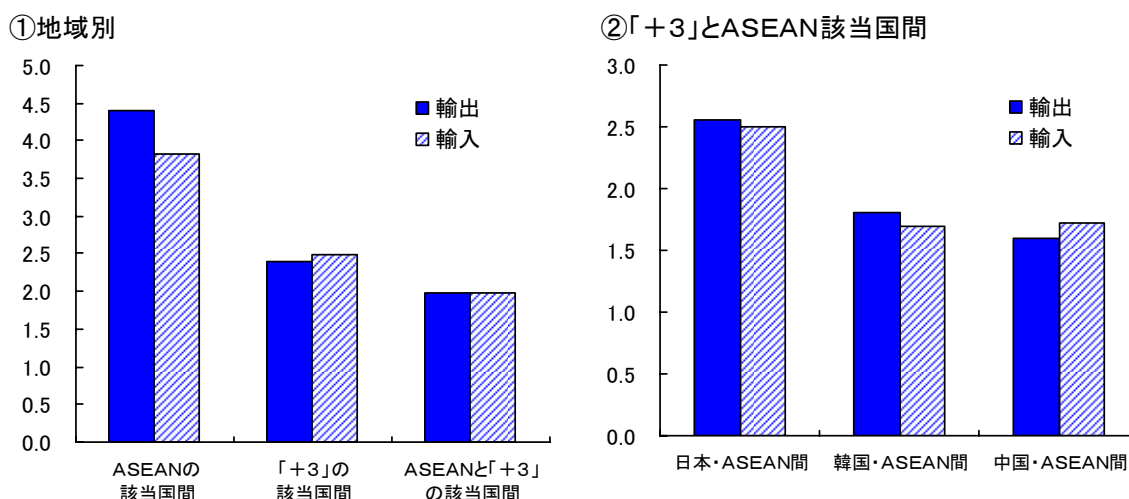
資料: World Trade Atlas

さらに、上記の15年貿易結合度を、ASEAN、「+3」(日本、中国、韓国)に分けてみると、輸出入ともにASEANの該当国間の係数が大変に高く、次いで、「+3」の該当国間の係数が高い。ASEANでは、域内を自由貿易地域とするアセアン自由貿易地域(AFTA)の共通効果特惠関税(CEPT)スキームによる輸入関税の段階的引き下げの



影響などにより、シンガポール、マレーシアを中心として緊密な関係が構築されている。また、「+3」の該当国間は日本、韓国等からの直接投資を背景に、中国へ生産・加工拠点が積極的に展開されたことが緊密化の要因となっている。一方、ASEANと「+3」の該当国間は係数が低いが、この要因は主に中国及び韓国とASEANとの結び付きが弱いことにある。これは、中国、韓国ともに東アジアとの貿易額のうち「+3」との貿易額が6～8割を占める(15年)ため、ASEANとの結合度が相対的に低くなっているものと思われる。さらに、中国の対ASEAN貿易はシンガポール、マレーシアとの輸出入額が大きい、中国進出を果たした日系等海外資本企業はこれらの地域にも製造拠点を有するケースがあり、こうした国際分業体制が形成されていることでASEANとの貿易上の競合機会が増加している一面もあるものと推測される(第Ⅱ-3-18図)。

第Ⅱ-3-18図 東アジア主要国における貿易結合度の比較(15年)



(注) 1. ここではASEANをフィリピン、シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイとした。「+3」は日本、中国(香港を含む)、韓国である。

2. ASEAN、「+3」の値は、該当国の15年貿易結合度を単純平均した値である。

資料: World Trade Atlas、「貿易統計年鑑」(国際連合統計局)

## (7) EU25について(参考)

### ～EU25の域内輸出入比率は低下傾向～

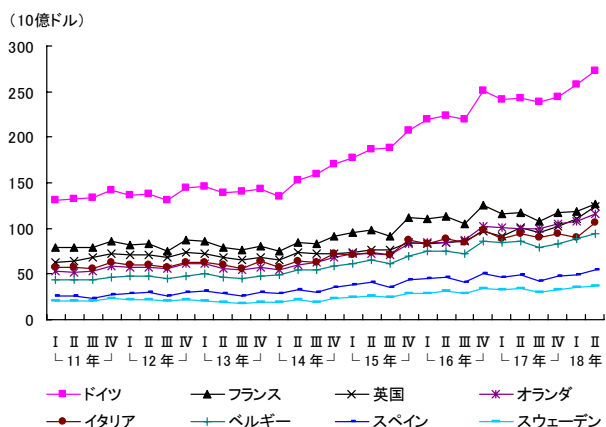
ここで、EU25の輸出入額及び域内貿易比率について簡単に確認しておく。

EU25各国の輸出入額はいずれもドイツが群を抜いて大きく、トップの位置をキープしている。次いでフランス、英国等のシェアが大きい。ドイツの17年輸出額は11年に比べ1.8倍、輸入額は1.6倍となっている。ドイツの17年輸出額を貿易相手国別にみると、フランス(17年構成比 10.1%)、米国、英国、イタリア、オランダ、ベルギー、オーストリア向けの順となり、この7カ国でドイツの輸出額の約5割を占める。同様に輸入額をみると、

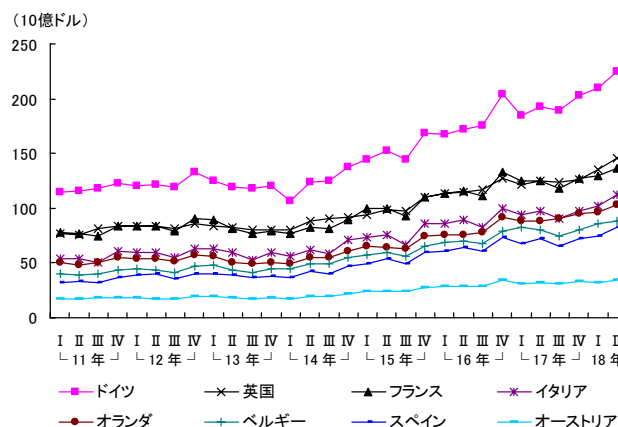
オランダ(17年構成比 23.0%)、フランス、ベルギーの順となり、この3カ国で5割強を占める。ドイツは輸出入額ともに、EU25域内との貿易取引が多いことがわかる(第Ⅱ-3-19図)。

第Ⅱ-3-19図 EU25主要国の対世界貿易額の推移(参考)

①輸出額



②輸入額

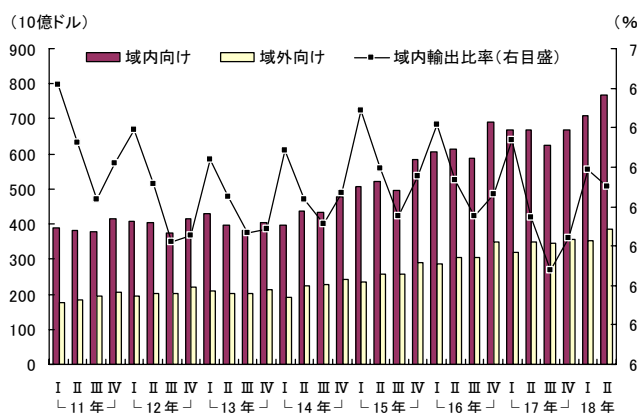


資料:World Trade Atlas

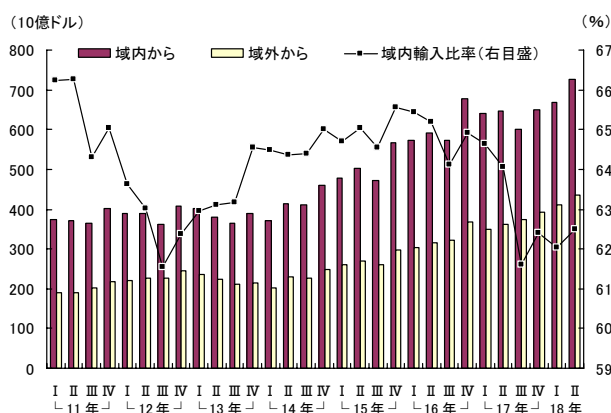
EU25の貿易額を域内外別にみると、東アジアと異なり、域内取引額が域外取引額を大幅に上回り、域内貿易比率は東アジアに比べ水準が高い。しかし域内輸出比率は、ばらつきがあるが総じて低下傾向となっている。域内輸入比率は12～13年の低下のあと上昇したが、近年は再び低下傾向となっている(第Ⅱ-3-20図)

第Ⅱ-3-20図 EU25の域内輸出入比率の推移(参考)

①域内輸出比率



②域内輸入比率



資料:World Trade Atlas

## (8) 結論

東アジアの対世界輸出入額は、中国を中心にその規模を急速に拡大しつつある。この主要因として、日本を含む海外資本による中国向け直接投資の増加によって加工・生産基地としての中国の役割が進展したこと、さらにこれを基盤として、主要な機械品目では、日本、韓国、シンガポールが「部品供給国」となり、中国を「最終組立国」とし製品の加工組立を行い、最終的に欧米等へ輸出するという三角貿易形態が進展したことが影響しているものと考えられる。このように東アジア域内では、部品を中心とした工程間分業ネットワークが形成されていることが推測され、これが結果として日本の欧米向け輸出額を抑制している。

また、このことにより、東アジア域内では輸出入比率の上昇傾向がみられ、貿易面での域内関係が緊密化している。これを貿易結合度でみると、ASEANの該当国間の緊密度が大変に高い。また主要な機械品目の部品供給ルートとしては、日本、韓国及びシンガポールから中国向けの他、タイからインドネシア向け、マレーシアからタイ向け、フィリピンから中国、タイ及びインドネシア向け等のルートが存在していることが観測される。なお、近年IT分野に重点を置いており国内市場が小さいフィリピンが部品等の輸出国として成長していることも観測された。

今後、近隣アジア諸国の経済発展に伴い、これら諸国との分業体制が一段と拡大することが想定される。さらに現在、世界各国で経済統合を目指す動きが活発化しており、東アジアにおいてもASEAN+日中韓+インド・豪州・NZの計16ヵ国について、関税削減のほか投資・知財・協力などを含む経済連携協定(EPA)交渉に向けた取り組みが行われている。このような経済統合によって将来的に貿易障壁が取り除かれた場合は、自由貿易による域内貿易の深化が東アジア諸国の経済発展を促進し、当該諸国の生産力、競争力を一段と高めるものと考えられる。